緑爽会会報　No. 192

2024年6月24日発行
日本山岳会　緑爽会
発行人　荒井正人

デザイン・制作　関塚貞亨

～～《報告》～～～

これは親しかった会員に書いていただくことになるが、そのことは、まさに会の歩みの記録であり、30 周年に相応しいと思われる。記録として残していくことが大事であり、7 月の行事が済んで一段落した段階で実行に移していきたい。

集合写真を撮って、総会を終え、引き続き講演会準備に入った。

（後列左より）横関邦子、大島洋子、小林敏博、鳥橋祥子、辻橋明子、中村好至惠、西谷可江、田村佐喜子、平野紀子、（中段左より）荒井正人、渡邊貞信、山川陽一、芳賀孝郎、竹中彰、渡部温子、川口章子、小原茂延、島田稔、岡義雄、富澤克禮、吉田理一、夏原寿一、田井具世、（前列左より）西谷隆亘、瀬戸英隆、近藤緑、松本恒廣、川嶋新太郎

講演会報告

講演会には、総会出席の緑爽会会員 29 名の他、2000 年に行われたアルバータ登頂 75 周年プロジェクト参加者など 18 名が参加し、全部で 47 名となった。

先ずは芳賀孝郎会員より、詳細な資料を元に「アルバータ峰登頂の歴史と伝説のピッケル」と題して、初登頂に至る経緯と、山頂に残されたピッケルのその後の運命、めでたく合体されるまでの経緯などが語られた。芳賀会員がこのピッケルの石突部分を早く探し出して本体と見合わせたいと書かれたのは 1997 年の「山」622 号で、その後、長野高校山岳部 OB 会の原会長から、石突部分は長野にあると知らせが入ることになる。こうしてピッケルは元の形になるが、そのことで日本、カナダの山岳会の交流はより深いものとなった。その友好協力態勢に感銘された芳野菊子会員は、当時教科書の編集に携わっておられ、中学校の道徳の教科書に国際理解・協力を学ぶ資料として「友好のピッケル」と題して掲載してもらったと、会場に来られていた芳野会員ご本人から話していただき、芳賀会員がその教科書現物を皆さんに示された。

続いて、芳賀淳子会員による紙芝居「アルバータ山のピッケルものがたり」が上演されたが、

そもそもなぜ紙芝居にすることになったのか、という点については、石川支部会員で、「深田久弥を愛する会」の大庭保夫会員から説明があった。大庭会員は北海道支部会友でもあり、芳賀会員宅をご夫婦で訪ねた折に、このピッケルの絵本をご覧になった奥様が、紙芝居にしたらどうかと発想されたとのことである。芳賀淳子会員はこの日に向けて、紙芝居の額も用意され、わかりやすいように言葉も補って上演していただいた。絵をめくる時には芳賀孝郎会員が脇から紙を押し出すような仲睦まじい場面もあって、会場は静かに真剣に絵を眺め、語りに聴き入っていた。

紙芝居を上演される芳賀ご夫妻

最後の質問コーナーでは、国際委員会の吉川正幸会員より、来年は初登頂 100 周年であり、ジャスパーへのツアーを企画しているとの紹介があった。追って会報「山」で告知されるとのことであった。

（報告：荒井正人、写真はいずれも石塚嘉一会員撮影）

「アルバータ山のピッケルものがたり」紙芝居を観賞して

中村 好至惠

大人の見る紙芝居、どんなものなのだろう…と興味津々でした。当日はその前に芳賀孝郎会員のお話があり、おおよそ“あらすじ”が頭に入った段階で始まりました。

まずはその前に、この紙芝居用の器具（昔、子供の頃に見た覚えがオボロにありますが）木製の箱。このキットも手作りとの説明があり、それは大変な手間と労力だったろうと想像しました。一口に“紙芝居の箱”と言っても、大きさ・開口部の広さ・すべての絵が収納できしかも一枚一枚引き抜き可能の厚み・自立して立たないと使えない事・しかしシッカリし過ぎると持ち運びするのに重くなる、など多くの条件をクリアーしないといけません。また紙芝居の紙も厚紙で丈夫なものが必要ですが、紙もまた元は木なので厚くなれば重いのです。加えて、そうした紙に作画していくのはかなり面倒だったと思いますが、普通の絵画用紙に描いたものを軽いパネルに貼り付けたのか？　など思いを巡らしながら、実際に形にするご苦労を思ったのでした。

さてその紙芝居ですが、先のお話が実際の絵と相まって自分の空想の世界に溶け込んでいきます。お話に添って次の絵が出てくるときのワクワク感は、子供のころの紙芝居と何ら変わりません。初めて拝見する私は、どんな絵が登場するのか…待ち遠しい思いで一枚一枚を見つめていました。そしてどの絵もきれいでしたが、私が一番印象に残っているのは、お話の核心部、伝説のピッケルがアルバータの白い峰の上にひろがる夜空と星とともに描かれたものです。それは夢のように美しく、本当に「伝説のピッケルだ！」と感じられる一枚でした。

絵画は現実をそのままに写し描くだけではありません。と言って、時代考証や風土生活などきちんと背景や情報、つまりリアリティを踏まえていないと作品にはならない難しさがあります。また絵本や紙芝居であれば、そこに作者の思いを存分に盛り込み、読み手（子どもも含め）が一緒に感動してくれるようなワクワク感を描き込みたいと思います。それらは幼い心であれば、時には一生忘れえぬ絵として残ります。私にとって、今回の夜空に挙げられて神々しく輝く「伝説のピッケル」の絵は、そうした一枚になりました。

《6 月山行報告》

今熊山から金剛の滝へ

小林 敏博

昨年の６月山行で企画したものの雨で中止となった今熊山から金剛の滝への道を、今年改めて企画した。遅い梅雨入り前だったこともあり、雨に降られずに実施することができた。山歩きは 5 年ぶりと仰っていた西谷可江さんを含めて参加者は 10 名（写真参照）。

9 時過ぎには武蔵五日市駅前に皆さんが集合した。駅前からバスに乗り下山予定の小峰公園を過ぎた次のバス停今熊山登山口で下車する。今熊神社入口と刻まれた大きな石碑が脇に建つ舗装道を今熊神社へ向かう。ゆるやかに上っていく道の両側にはいく本もの大きな栗の木が植えられていて、その枝先には細長い白い花がたわわに垂れ下がっていた。25 分ほど歩き右手一段高い場所にある鳥居が目に入る。鳥居をくぐり石段を上ると今熊神社の遙拝殿の前に立つ。小振りだが豪壮な権現造りの社に手を合わせてから出発する。

登山路は今熊山山頂にある本殿への参道なので、苔の着いた古い石段がところどころに残っている。歩き始めからやや急坂の登りのため息が上がらないようゆっくりと歩き始める。石段が崩れていたり、岩や太い根っこが現れたりと少し手強い。足元には時おりドクダミの花が咲いていた。道はやがて勾配がゆるみ、また勾配が増してきた辺りの右の樹木に『天狗岩』の表示が掲げられていた。岩がちの急斜面とその前に石碑が 2 つあったが、そのいわれは記されていない。天狗岩を周るように道は続き、天狗岩の上を通り過ぎた先にベンチが 2 つあった。五日市の街を見下ろせることができ、風の通る場所なので休憩する。曇りがちの天気だが吹き抜ける風が爽やかだ。

ベンチからやや広い道を下るところに紙垂（しで）を付けたしめ縄が飾られていた。しめ縄は神のいる場所と現世（うつしよ）の結界の役割をもつといわれているので、ここはやはり参道で神を祀る頂きへ登っていることを改めて感じた。しめ縄の下を通り過ぎてひと登りするとトイレとベンチのある広場に出る。ここからの眺めも良い。さらに登って今熊開運稲荷社を脇に見て石段を上がると今熊山山頂に着く。山頂の広場には新しい山名標柱のほかテーブルやベンチもあるのでここでゆっくりと昼食休憩とした。奥の一段上には白い社の本殿が建てられている。

今熊山山頂で（後列左から）石塚嘉一、島田稔、横関邦子、荒井正人
有岡純子、富澤克禮、（前列）鳥橋祥子、川口章子、西谷可江、小林敏博

昼食を終えて金剛の滝へ向かう。本殿の西側にある石垣の脇を通って下り道に入る。下りもやや勾配があり、岩や砂礫の混じる道なので慎重に下る。登りもそうだったが下りも私の後に島田さん、川口さん、鳥橋さんの順で、

昼食を終えて元気になったせいか 3 人で戦争を挟んだ辺りの食にまつわる話でしばらく盛り上がっていた。「一升瓶に玄米を入れて竹で突いて･･･」「イナゴはよく捕りました」「唯一のタンパク源だったから」などなど。話が尽きないうちに金剛の滝への旧道（今は通行止め）との分岐に着く。ベンチがあるので軽く休んだ。

ここからなだらかな道を下るとすぐに金剛の滝への道標が現れる。そのままま っすぐ行けば東京電力の変電所に出るが、左側にあるかなり狭い急坂の九十九折道へ進む。階段が設けられているが、段差も大きく時には横向きになって慎重に下らなければならないような道だ。10 分ほどで勾配はようやくゆるみ金剛の滝から流れる逆川に下り立つ。この辺りは伏流水になっているようで水の流れは見られなかった。

左奥にある金剛の滝へ向かう。両側の樹木の枝にはキヨスミイトゴケがいくつもぶら下がり、またイワタバコの葉が左側の岩壁を覆っていた。ひと月も経たないうちにこの岩壁はイワタバコの独特な紫の花で覆われるだろう。まだ滝は見えないが急に辺りは涼しくなる。マイナスイオンを豊富に含んだ大気に包まれているのが分かる。さらに進むと落差約 4m の雌滝が目の前に現れた。滝の前でザックを置いて雌滝の脇にある岩を穿った滑りやすいトンネルを鎖を伝ってくぐると約 18m の雄滝が目の前に現れる。滝の中ほど右側には不動明王像が祀られているので、修行の場だったのかもしれない。皆さん、顔を上げてしばらく滝を見上げていた。

滝を背に元来た道を戻る。先ほど下り立った場所を通り過ぎて砂防ダム脇から北へ急斜面を登る。10 分足らずだが、登りきった尾根上ではずんだ息を整えて東へ小峰公園西にある園内最高地点（336m）を目指す。ここからはゆるやかな起伏の尾根道を登り下りしながら少しずつ高度を上げていく。途中、右手に東京電力変電所の構築物が目に入り、まるで要塞のようで異様な景色が印象に残る。最高地点は四囲が雑木で囲まれて展望はない。近所の方なのか犬を連れて休んでいた。

最高地点から一気に階段を下って道なりに進むと、馬頭観世音の石碑がある。その先、道は 2 つに分れて右の道を少し登ると東屋のある展望台に着く。さして広くない展望台は北側が開け、日の出町の勝峰山から西へ金比羅尾根、麻生山、日の出山、御岳山、奥の院などの山々を眺めることができた。脇の木に咲いている淡いピンクの花にいく人か集まっている。「ムラサキシキブだね。葉がヤブではないですね」などと富澤さんから解説をいただく。展望台から桜尾根へ出て整備された道を下る。道の脇にはウツボグサがそこここで紫色の花を付けていた。桜辻で左へ下り広いふれあい広場に到着した。武蔵五日市駅まではバスで戻る。

石塚さんにたび重なる人数変更でご迷惑をかけたが、予約していただいた、アジフライと新鮮な魚が旨い『魚治』で全員が山歩きの疲れを癒やした。　　（写真提供：石塚嘉一）

《コースタイム》

今熊山登山口バス停 9:40→10:05 今熊神社 10:25→10:55 ベンチ 11:05→11:25 今熊山頂 12:00→12:30 金剛の滝への旧道分岐・ベンチ 12:40→13:00 金剛の滝 13:20→14:10 小峰公園最高点 14:20→14:30 展望台 14:45→15:00 小峰公園ふれあい広場

6月山行に参加して

有岡 純子

昨年は雨で山行が中止になってしまい、「魚治」のみ参加済みとなっている。今年は梅雨入りが遅れていて、当日は薄曇りで暑すぎないちょうどよい天候となった。平日なのに拝島を過ぎても電車は混んでいて、こんな遠くまで通っている人がいることに驚いた。

武蔵五日市駅は混雑もなく、集合もスムーズだった。島田さんと横関さんから地図をいただき準備は万全。バスに乗り込み今熊山登山口へ。バスを降りるとはじめは今熊神社まで車道歩きである。大きな栗の木を見たり、蝶の話や膝痛の話をしながら歩く。私は 3 月に初めて膝の後ろが痛くなり、整形外科に通っているのである。話を聞いてみると膝痛は経験済みの方が多く、太ももを鍛えるとよいとの情報をいただく。

今熊神社に着いて、一休みする。参拝して、屋根の形などについて小林さんからレクチャーしていただいた。熊野神社に由来があるそうで、熊野古道に先月行ってきたばかりなので、最近ご縁があるなあと感じた。

そこから階段状の急登が始まる。ツツジの季節は過ぎていて、緑の生い茂る中をゆっくり登っていった。山頂にはテーブルとベンチがあり、貸し切り状態であった。ここでお昼休憩をとる。なぜか女性 5 人と男性 5 人がきっちり分かれて座っていたのが不思議だった。

金剛の滝への近道は、だいぶ前から崩れていて通行止めになっていた。回り道をして滝まで下りていくと、思ったよりミニサイズの滝があった。細いトンネルを抜けるとその先に立派な滝がちゃんとあった。滝の近くは冷気が満ちていて、しばらく涼んだ。

また登りになり、変電所の横を通っていく。こんな山奥にとても大きな変電所があることに驚いた。小峰公園最高地点に着くと、犬の散歩をしている方がいた。犬も飼い主も元気である。

公園の中はいろんな花が咲いていて、富澤さんに教えていただきながら歩いた。ムラサキシキブやウツボグサなど…。

またバスに乗り武蔵五日市駅へ戻る。全員で「魚治」へ向かうが、この時間はもう晴れていて車道歩きが暑い。「魚治」までの上り坂が長く感じた。乾杯のビールが格別だったのは言うまでもない。久しぶりの参加だったが、皆さんと話せてとても楽しい山行だった。

近況報告 （皆さんから総会出欠ハガキで寄せられたものをまとめましたので、書かれている時期は少し前です。また、いただいた時の在籍者分を全部掲載しましたことを、ご了承願います）

芳賀　孝郎　この度は、私の講演、妻淳子の紙芝居上演の機会を与えていただき、誠にありがとうございます。只今その準備中です。よろしくお願い申し上げます。

山本　良子　新しい年度もお世話かけますがよろしくお願い致します。体調にムラがありますが、リハビリしつつ快復を願っています。

田村佐喜子　桜の満開から少し散り始めた松本城の周辺は平日にもかかわらず大勢の人々の流れです。特に外国人が多く賑わっています。バスで普通 10 分程度の所が、40 分～1 時間と一寸きざみの運行です。でも、北アルプスの雪山の景色が見事です。お出かけください。

五十嶋一晃　『薬師岳・奥黒部の博文』の発行(執筆)、『太郎平小屋　70 周年を迎えて』の編集に取り組んでおります。

岡　　義雄　東京多摩支部です。以前より、文化の香りの強い緑爽会に興味を持ちつつも、歩く事ばかりに夢中でしたが、半年前に人工股関節に置換したのを機に入会させていただくことにしました。どうぞよろしくお願い致します。（支部の自然保護委員会、野火止保全林の会、低山を楽しむ会のメンバーです）

梨羽　時春　身体の調子が良くないので山も行けません。

松本　恒廣　目下、〝絶好調〟とまではいきませんが、まあまあです。ヤマケイ新書『半日ゆるゆる登山』を片手に同志をつのります。

佐藤　淳志　熊やカモシカと戯れています。昨年は 13 年振りに鳥海山のイヌワシが巣立ち、今年も調査に連日入っています。今は、東北電力や国交省東北整備局の環境調査が忙しく、山に入る機会も多く楽しく過ごしています。

福田　光子　幹事の皆様、会務ご苦労様です。今年は本当に雪が少なく、暖かかった。熊も冬眠を忘れたように早くから出没しており、脚力の衰えた高齢者は散歩もハイクもままなりません。桜も菜の花も早々に一斉に開花からあっという間に散りだした。これから日本の四季はどうなるのか？と問いながら花見をしました。

近藤　　裕　①昨年 12 月 30 日、税理士を廃業し、税理士会を退会しました。②今年 3 月 5 日、ロータリークラブから 50 年皆勤賞をもらいました。

近藤　　緑　リハビリを続けて何とか無事に過ごしています。昨年度『山岳』の山本良三さんの文章のおかげで私は救われました。さすが弟と思いました。

関塚　貞亨　3 月下旬に満 99 歳になり、歩行も困難な状態です。10 歩歩くと 30 秒か 1 分休み、300m先のコンビニまで 10 分以上かかります。総会に出席したいが無理なようです。102 歳で永年会員になりますが、そこまで生きているか不明です。総会の盛会を祈っています。

吉田　理一　故櫻井昭吉さん(2 月 26 日 89 才で死去)の追悼文を執筆中です。三笠宮家の姉弟を浅草岳スキーツアーに、深田久弥を未丈ケ岳・平ケ岳・魚沼駒ケ岳に、田中澄江を浅草岳・平ケ岳に、高橋通子を越後駒ケ岳駒の湯登山口に案内する等の残された足跡があまりにも大きくて纏めるまでにかなりの時間を要します。「日記　戦後復刊第一号発見」も会報に投稿予定ですが数か月先になる見通しです。

里見　清子　ご無沙汰しています。元気です。2020 年から出掛けることを控えているうちに山が遠くなりました。最近は友人と広河原まで車で出掛けても、北岳に向かって「今日は来ただけさ」と情けない状況です。

渡部　温子　発熱せずに半月経過。体調は良くなりつつあります。総会で皆様にお会い出来るのを楽しみにしています。

川嶋新太郎　新緑の季節になりました。いつも何かとお世話になります。この度もお知らせありがとうございます。皆様の健康を祈ります。

髙辻　謙輔　昨年は小泉弘氏の講演会参加のみで、例会も山行も欠席の常習犯。申し訳ありません。会報は毎号楽しみにしております。10 月の安曇野の山旅はぜひ参加したいと考えております。

南川　金一　調べたいことがあって、『山岳』や会報のバックナンバーに目を通している。再発見しきりで、『山岳』・会報は山の情報の宝の山であると、改めて思う。図書室も然り。ただし、宝は足元に転がっているものではなく、石の中から探し出すもの。

平野　紀子　4 月 19 日、鳩待峠への入山が始まりました。尾瀬沼は連休も多くありません。5 月下旬よりシーズンです。今から歩くのが楽しみです。会のお世話をしてくださる皆様、ありがとうございます。

森　　武昭　元気にしています。盛会を祈念申し上げます。

髙橋　清輝　小生、大雪、十勝の山麓にアルパインロッジがあり、総会の日はロッジに滞在しており、恐縮ですが欠席させていただきます。

大島　洋子　山は遠くなりました。散歩の日々です。代々木公園にウワミズザクラが何本かあります。今年もきれいに咲きました。

島田　　稔　JAC、緑爽会入会 30 年。大腸がんも 30 年。90 歳を超えて頭も体も動作もガタガタ、クタクタのこの頃です。関塚さんには敬意を表するばかり。何とか皆様のご迷惑とならないよう努めたいと念じていますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

小清水敏昌　5 月 7 日に順大病院に入院し、翌日 OP です。基底細胞癌のため、申し訳ありませんが欠席致します。ご盛会を祈念いたします。

長沢　　洋　なかなか会合には出られなくて恐縮です。盛会をお祈りします。

辻橋　明子　登りのペースが超ビスター―リになりました。近郊の低山をのんびり歩いています。

間瀬　　泉　盛会をお祈りいたします。

富澤　克禮　相変わらず花を求めて高尾山を歩いておりますが、体力の衰えを痛感しています。急ぐ時などは、残念ながらケーブルカーを使う回数が多くなってきました。所属する東京多摩支部では、「低山を楽しむ会」と「山の唄を歌う会」には、出来るだけ参加して楽しんでいます。これらが、健康維持とストレスの解消法です。

また、東京多摩支部の奥多摩 BC 運営委員会では、最後のご奉公として、旧い会員の方から寄贈された「山岳」の合本・製本の準備作業をしてきました、業者に渡す段階になりました。完成を楽しみにしております。

この作業をするに当たっては、日本山岳会百年史の南川金一さんが書かれた『山岳』の百年の年表が大いに役立ち、助けられました。

「山」については、合本・製本を昨年終わらせました。残念ながら戦中～戦後の 101 号～200 号は欠号ですが、他は全て揃いました。

山川　陽一　脊柱管狭窄症手術をし、4 月 25 日、無事退院しました。

竹中　　彰　今回の芳賀夫妻の講演に期待しますが、今後も JAC の長老クラスの話を聴く機会を増やしていただければと思います。

樋口みな子　夫の闘病中は旅も山歩きもできませんでした。緑爽会の行事にも機会があれば参加したいです。

夏原　寿一　私は多摩支部の同好会「山の唄を歌う会」に入っています。この会は数年前に発足し、コロナのころを除いて毎月、八王子市生涯学習センターの防音室で歌っています。懐かしい唄、知らなかった唄、いろいろ歌います。大きな声を出すのは体にもいいそうです。ヨーデルの CD を聴くこともあります。緑爽会からは、世話役の石井さんをはじめ岡、神﨑、近藤（裕）、高橋、小清水、辻橋、富澤、竹中、西谷夫妻の

諸兄姉が顔を出し、一大勢力になっています。帰りに、1000 円そこそこで一杯やれる餃子屋でお喋りするのも楽しみです！

瀬戸　英隆　ご連絡多謝。かなり体調が良くなりましたが、未だ少々おかしいです。でも出席します。年末に 90 歳です。

田井　具世　今月は二回上野へ行き、本阿弥光悦展の書画骨董、気持ちが浮き立つような美しい遊女達の花見姿、大吉原展を観て、久し振りに心身共に気分が一新。鈍った体に活が入ったようです。

渡邊　貞信　岡野金次郎の生涯を書いた『孤高に生きた登山家　岡野金次郎評伝』の原稿チェックを完了しました。今後ヤマケイの担当に出版をお任せとなります。

深田森太郎　返信が遅くなり失礼いたしました。

石井　秀典　山岳古道調査で忙しくしております。

西谷　隆亘　平素は大変お世話になりまして有難うございます。昨年の忘年会で久しぶりに皆様

西谷　可江　にお目文字でき幸せでした。独り歩き、上階での生活を禁止されて以来 5 年経過しました。週 2 日の day　care（2 時間）通いです。（隆亘）最近は walking(4 キロ)の回数がぐっと減りましたが「walking しながら自然にふれること、人に会うこと、笑うこと、本を読むこと、腹八分目」を目標に simple life の日々です。（可江）

中村好至惠　いつもご苦労さまです。秋 10 月の山旅が実施されるときには、どうぞよろしくお願い致します。

有岡　純子　今年に入ってひざの調子が良くないので、ゆるい山に行くようにしています。熊野古道に参加する予定なのでがんばります。

松川　征夫　総会は都合により欠席させていただきます。ご盛会をお祈り致します。いつもありがとうございます。

横関　邦子　最近は山歩きからいろいろな世界が拡がり、楽しんでいます。可憐で質素な山の花、野鳥たちの姿と鳴き声、山にいるチョウの美しさとヒラヒラ飛ぶ姿など。ベランダのビオラにチョウが卵を産み、幼虫➡サナギ➡羽化してチョウに変態しました。この流れは自然の神秘です。でも羽化がうまくいかなくて飛べないチョウがいます。今 2 頭のチョウを保護しています。自然の厳しさも感じています。

相良　泰子　5 月 9 日は鎌倉で所属している会の行事が決まっているため、講演会に出席出来ず残念でございます。北海道からご上京くださいますのにお目にかかることが出来ず、くやしく思っております。

藤下美穂子　「山岳図書を語る夕べ」で尾崎喜八のお孫さんに、始まる前、一番好きな詩の話をした。実際は家族ぐるみの山登りを楽しんでいたのですよと仰った。ご一緒された山の話がもう少し聞きたかったが、溢れる思いの話に魅了された。今は薯版の行人句集を楽しんでいる。

小原　茂延　体調と相談しながら本・支部の活動をすこしづつ再開しています。所属支部に同好会をつくり、山文化としての登山史・生物・山書・絵画（観賞）等の伝承を始めて 3 年目に入り、メンバーとの放談を楽しんでいます。

※総会の開催が 4 月であれば、出欠ハガキに書いていただいたものが 4 月会報に載せられるので、まさに近況となるのですが、今回は間が空いために少し時期がずれました。ご容赦願います。

～～《寄稿/投稿》～～～

四松庵での晩餐会と人力車

南川 金一

山岳会が発足して５年後の 1910（明治 43）年１月 16 日、新年晩餐会が開かれた。場所は代々木の志賀重昂の別邸・四松庵だった。当時は豊多摩郡代々幡村、東京市外である。四松庵があった代々木山谷 128 番地は、甲州街道沿いの現在の文化服装学院の裏手あたりであり、新宿停車場から歩いてもそれほどの距離ではない。前日来の雪で「泥濘膝を没する」状態とあって、小島烏水は新宿で降りて人力車に乗っている。「四松庵と言ったら、すぐに解った。前に来たことのある車夫だそうで、松という字のある家でしょうと言った。日本の労働者は大概字が読めるからありがたい。しかし、この車夫、字が読めるだけ脛の方で差引をつけて、少し坂道にかかると、旦那ちょっと下りてください」と書いている（『山岳』第五年第一号、「四松庵雑記」）。

この日集まったメンバーがすごい。『山岳』に載った記事の見出しに「山岳界の明星一堂に会す」とあるのもオーバーではない。柳田国男、地質学者山崎直方、植物学者白井光太郎、作家吉江喬松（孤雁）・田山録彌（花袋）、画家大下藤次郎・丸山晩霞、医学者二階堂保則、田部重治の兄で英文学者田部隆治、農政学者那須皓、天文台の小倉伸吉、陸地測量部の斎藤（後に高木）菊三郎・今村巳之助ら 40 人で、山岳会会員という共通項がなければ顔を合わせるなどということのない面々だった。人類学者坪井正五郎、画家高島北海は風邪のため欠席だった。山岳会への関心もさることながら、志賀重昂の別邸への興味も大きかった。出席希望者は相当に多かっただろうが、会場の制約から幹事が大ナタを振るったに違いない。和式の清籟書屋の８畳と９畳をぶち抜きとはいえ、参加者 40 人とあっては超満員、食事ののち「山岳５分演説」と題しての山岳談での交歓、記念はがきへのサイン会など、４時開会で 10 時近くまで蝋燭の下、山の話題で大いに盛り上がった。天城山の兎肉による仏蘭西料理、酒は山長正宗、醤油は山サ、茶は山本園、菓子は三笠山、桃山、富士山せんべいという山へのこだわりよう。志賀夫人や大下夫人、幹事の神東淳夫人が配膳に走り回って、「志賀夫人は、十二時近くなって、電車も車もなく、赤坂の自宅まで徒歩で帰られたそうだ。愈々もって恐縮の次第である」と小島烏水は書いている。車とは、もちろん人力車である。

志賀重昂の本宅は赤坂霊南坂、アメリカ大使館裏手だったが、1916（大正５）年、代々木 476（現在の代々木４丁目 42）、四松庵から南西へ 15 分ほどの所に転居した。それに伴い、四松庵もそこに移転。昭和 2 年志賀重昂が死去したので、四松庵の南北亭が出身地・岡崎市の東公園に移築された。

人力車について、『明治東京逸聞史』（平凡社、昭和 44 年）に明治 36 年の雑誌の記事が載っている。「電車が出来て、人力車は多く山の手に集まるという現象をきたした。それで車賃も安い。この間、半蔵門から四谷見附まで、しかも雨降りの夜だったのに、僅かに五銭であった。或る老車夫が、一日二十銭を稼ぐのがやっとだとこぼしたが……。といって他に転ずる職業もなくて困っているというのが実情だ。…三十年前に駕籠を駆逐した人力車が、三十年後には電車に駆逐せられる運命に見舞われたのである」。また、明治 37 年発行の『東京明覧』は、人力車について「市内にありては最要の交通機関というべし。故に市内至る所人力車あらざるはなく、その数、一人乗り三万八千輌、二人乗り三千輌あり。その一つを宿車（やどぐるま）、一つを辻車（つじぐるま）という。宿車は数輌の車と数人の車夫を備え、未知の客の需要に応ぜざるを一般の慣習と為す。其の車輌は比較的清潔にして、車夫もまた壮年健脚なり。辻車は街衢の辻にありて往来の客の需めに応ずるより生じたる称呼にして、其の車輌は概ね清潔ならず。またその車夫は老壮を分かたず」とあって、人力車にもハイヤーとタクシーのような違いがあったようだ。

追悼　櫻井昭吉さん

吉田 理一

日本山岳会在籍 65 年の永年会員櫻井昭吉さん(5021 番)は、あと 17 日で 90 才になろうという 2 月 26 日亡くなられた。JAC 入会は昭和 35 年で、当時小出町で「伊倉書林」という書店を経営されていて首都圏移住後に日本山岳会理事を務められた伊倉剛三さんの紹介であった。

緑爽会の令和 3 年 12 月の講演会は「深田久弥　その人となりと魅力」と題して講師は横山厚夫さんと櫻井昭吉さんであった。

私は同じ町に住む越後支部会員として山岳会の行事にはご一緒する機会が多くあり、櫻井さんしか知り得ない数々のエピソードも聞かせていただいた。

昭和 34 年 3 月快晴の浅草岳スキー登山に高松宮様・大学生の三笠宮甯子様・弟で高校生の寛仁殿下(髭の殿下として親しまれ、昭和 62 年に当時の浩宮様とともに日本山岳会に入会、10002 番)をムジナ沢をラッセルしてご案内した。

未丈ヶ岳をバックに深田久弥と櫻井氏（左）

深田久弥は日本百名山執筆のため昭和 37 年 9 月 15 日から 4 泊 5 日で平ケ岳を、11 月 11 日～14 日に魚沼駒ケ岳(呼称は現在越後駒ケ岳に統一)から八海山を縦走している。両山とも櫻井さんがガイドを務めた。深田久弥はその著「日本百名山」の平ケ岳の項で櫻井さんを小出山岳会の S さんと紹介している。

深田久弥は未丈ケ岳に 3 回目の挑戦で登頂しているが、第一回はあまりに遠くて断念(昭和 39 年 3 月 28 日)。第二回目は道に迷って断念(昭和 42 年 11 月 19 日)。第三回目で登頂できた(昭和 43 年 10 月 20 日)。櫻井さんは第一回と第三回にガイドとして参加していて、山頂で櫻井さんが持参した深田著「日本百名山」に深田久弥が署名する写真が残されている。(会報 169 号参照)

田中澄江著「新花の百名山」には櫻井さんがガイドした浅草岳と平ケ岳が紹介されている。浅草岳は雨にたたられて前岳までと記されている。平ケ岳は疲労困憊して 4 時間かかってようやく玉子石に到着、「今は頂上が大事と足をひきづりひきづり木道の上を歩き・・・・」と記述されている。平ケ岳は時間切れで山頂までたどり着けなかったと櫻井さんからお聞きした。この日の田中澄江パーティーは 20 人であったが下山に時間がかかった田中さんを櫻井さんが登山口まで案内したときは既に薄暗くなっていた。

この他新田次郎を湯之谷村鷹ノ巣へ(昭和 41 年)、岩崎元郎を未丈ケ岳へ(平成 14 年)、今井通子を越後駒ケ岳、駒の湯登山口へ(平成 26 年)案内している。

櫻井さんは自然解説に積極的に取り組まれ尾瀬保護財団の評議員や尾瀬ガイド協会の初代副会長を歴任された、これら長年の活動に対し平成 26 年に環境大臣から表彰されている。

戒名には尾瀬燧ケ岳の「燧」と「岳」の二文字が付けられていて生涯を山とともに生きた櫻井さんに相応しい位牌が祭壇に置かれている。

（ご参考）下記の会報もお読みいただきたく思います。

会報 169 号に吉田さん執筆の「三回目で登頂　深田久弥の未丈ヶ岳登山」を掲載。

会報 177 号には、2021 年 12 月 4 日の講演会「深田久弥　その人となりと魅力」を掲載。

『東京市史稿』の編者・塚越芳太郎の出生地は「岩永村」か「岩氷村」か

富澤 克禮

2023 年 12 月 6 日（水）に『山岳』2023 年 Vol.118 が届きました。

目次を見て【調査・研究】欄の「『東京市史稿』と木暮理太郎…南川金一」が目に止まりました。

木暮理太郎は、群馬県出身である小生にとっては、山岳会の先人の中でも、ある意味特別な存在で、金峰山の麓の金山平で開催される木暮理太郎祭にも、『車窓の山旅　中央線から見える山』の著者の故山村正光氏が仕切っていた頃に、幾度か参加して、諸先輩の薫陶を受けたことを思い出しました。

南川さんは、「木暮理太郎は日本山岳史のうえで、また、日本山岳会でも忘れてはならない存在である。とりわけ、木暮理太郎が編集者であった時代の『山岳』の充実ぶり、また『山の憶ひ出』に見る、あくなき山の探求は他の追随を許さないものがある。わが国のヒマラヤ研究における嚆矢でもあった。しかし、木暮理太郎にとって、それはあくまでも余暇における成果であって、本来の仕事は、『東京市史稿』の編纂だった」と書かれています。このことは、全く初めて知ったことでした。

また、木暮理太郎が『東京市史稿』にかかわる経緯について次のように記述されています。

「東京市史の編纂は、1906（明治 39）年、尾崎行雄東京市長に懇望されて塚越芳太郎が担うこととなった。塚越は、群馬県出身、文学者・史論家として名声が高かった。木暮理太郎は、塚越芳太郎に請われて、翌 1907（明治 40）年 2 月 28 日から東京市史編纂にかかわることになった。塚越と木暮は共に群馬県出身ということもあり、肝胆相照らす間柄だったようだ。」

読み進めて、塚越芳太郎という人物に、興味を持ち、（注）を見て、次のことを知りました。

「塚越芳太郎（1864 年～1947 年）上野国（明治以降群馬県）碓氷郡**岩永村**（1955 年倉渕村となり 2006 年高崎市に）に生まれる。」（以下省略）

これを読んで、「ああ、岩氷（いわこおり）」出身の人かと、さらに興味を持ちました。というのは、幼少の頃一緒に住んでいた父方の祖母の実家が碓氷郡烏渕村大字川浦であったので、すぐ近くの岩氷という地名は、祖母の話や親戚の人の話に良く出てきており、記憶に残っていたからです。

この日の夜は、引き続いて【調査・研究】欄の「『小島烏水　山の風流使者伝』を再読して」（山本良三）と「山岳書が危ない―散逸の危機」（神長幹雄）等に目を通していたら、午前 2 時近くになり、遅い就寝となってしまいました。

そんなことで、翌 12 月 7 日（木）、日課にしている高尾山への山行は、午後出発になりました。午後 2 時頃、高尾山口行の電車を待つ京王線高尾駅のプラットフォームで、全く偶然に、南川さんにお会いしました。南川さんは、藤野の方に柚子を取りに行った帰りとのことでした。電車を待つ数分の間でしたが、「昨夜、『山岳』の木暮理太郎についての労作を読ませて頂きました」「木暮理太郎がああいうことをやっていたことは、ほとんどの人が、知らないんだよ。」というような話をしたのを覚えています。それにしても、この偶然には、驚きました。

その後、岩氷について現在この地名がどうなっているのだろうかとの興味から、色々調べていた時、『山岳』では、塚越芳太郎の出生地が、「岩氷」ではなく、「岩永」になっていることに気が付きました。

「岩氷村」の町村合併等による推移は、以下の通りです。いまでも、**岩氷**という地名は残っております。

1. 1889 年（明治 22 年）4 月 1 日　町村制施行により、川浦村、**岩氷村**、水沼村が合併し碓氷郡烏渕村（うぶちむら）が成立する。この時点で、碓氷郡烏渕村**岩氷**に。
2. 1955 年（昭和 30 年）2 月 1 日　群馬郡倉田村と合併し、群馬郡倉淵村となる。群馬郡倉渕村**岩氷**に。
3. 2006 年（平成 18 年）1 月 23 日　高崎市に合併し、高崎市**倉渕町岩氷に。**

12 月 16 日（土）の緑爽会の忘年会の席で、このことについて資料を添えて、南川さんにお伝えしました。

その後、南川さんから 12 月 18 日付の手紙を受け取りました。「参考にした東京都公文書館刊行の『東京の歴史をつむぐ―草創期の東京史編さん事業―』を調べましたところ【岩永村】になっていました。この本は校閲・校正が甘く、木暮理太郎がすべて小暮理太郎になっているなど困ってしまいます。」とのことでした。塚越芳太郎についての詳細な紹介のコピーも同封されておりました。

また、2024 年 2 月 10 日付の手紙では、都立中央図書館に行って『倉渕村誌』を調べた結果をいただきました。

南川さんの興味は、「岩氷」の地名の由来でしたが、『倉渕村誌』によると「現在その由来はまだはっきりしない。しかし、岩氷は古い地名でその由来は古代まで遡ることができるのではないだろうか。いまのところ、全国で岩氷という地名は他に見当たらない」とのことでした。

また、『倉渕村誌』の倉渕村出身の人物として、冒頭に塚越芳太郎があり、続いて塚越姓の人物が 2 人載っており、そのコピーも同封されておりました。

今回の一件から、南川さんの知的好奇心の旺盛さと、行動力には、改めて感心させられました。また、文書に残す時の、固有名詞の取り扱いの難しさとその重要性を教えられました。

なお、岩氷の具体的な場所は、浅間隠山か鼻曲山を二度上峠から登る時、車で高崎方面から行く場合、最後の集落のあるあたりです。

しれとこ 100 平方メートル運動での出会い？

荒井 正人

会社に入って 3 年目の 1977 年のことだった。「しれとこで夢を買いませんか」というキャッチフレーズが気になって「しれとこ 100 平方メートル運動」なるものの存在を知った。当時の斜里町町長、藤谷豊氏が発起人となって始まったナショナル・トラストの先駆けである。

概要を大雑把に言えば、知床半島の岩尾別の先に、開発が入ったエリアがあったが、作物を生産するにはあまりに厳しい土地であり入植者もお手上げで、その土地を離れてしまった。そこに目を付けた観光開発の手が伸びようとしてきた時に、土地を斜里町が買い、植樹を行って元の自然に戻そうという計画が立てられたのだ。今でいうクラウド・ファンディングである。

以下は、それに関して、こんな話しがあったというお話しである。

この運動に参加した 4 年後の 1981 年、私は東京に転勤となっていたが、住所変更届を出したことで参加者名簿が送られてきた。都道府県別の名簿を見ていくと、著名人として「王貞治」「海音寺潮五郎」などの名前を見つけた。山の関係では「坂本直行」「田淵行男」もあった。その後転勤を繰り返す中で、名簿は段ボールに入ったままで、定年後今のマンションに越してきてからは、ベッドの下の収納スペースに置かれていたのだった。ざっと 40 年が経っていた。

ところが昨年の暮れに、そのスペースに何が入っているかも忘れているくらいなのでと覗いて

みた。するとこの名簿があったのだ。懐かしさも感じながら大掃除もほったらかして名簿を見て行くと、上記の著名人はすでにアンダーラインが引いてあったが、当時の私にとっては全く縁のなかった方で、山登りを続けていなければ、あるいは日本山岳会に入らなければ気づかなかったであろうお名前が何人か出てきたのだ。

お一人は緑爽会の渡部温子さんである。早速「つかぬことを伺いますが」とお尋ねすれば、まぎれもなく私です、とのご返事。「渡辺正臣さんもあると思いますよ」とおっしゃる。実は渡辺正臣さんのお名前は山の著書で存じ上げていたから、既に「？」付きでアンダーラインは引いてあった。温子さんがおっしゃるには「正臣さんとは日本ハイキングクラブで一緒だったから。梨羽さんはないですか？」とのことだったので、目を皿のようにして探したが見つからなかった。名簿作成は多分この時だけで、少し後で登録された方は名簿にないから梨羽さんはそういうことだろうと解釈した。しかし、そんな繋がりをここで発見するとは思わなかった。

さらに見て行くと、当時は存じ上げなかった、北のアルプ美術館の山崎猛さんはご家族で登録されていた。亡くなられてしまったが、まさか後に山崎さんにお会いすることになろうとは。つい先日も年一回の通信「緑風」が美術館から届いたばかりであった。

またこの会報に近藤緑さんが書いて下さった石原國利さんのお名前もあった。私はお会いしたことがないままに、昨年亡くなられたが、緑爽会では対談においでいただいたことがある。

私でさえ、こんな名簿上の出会いがあるのだから、きっと自然保護委員会の諸先輩方が見れば、もっとたくさんの方に出会えるのではないだろうか。

さてしかし、なぜこの運動に参加したのだろうか。当時の私に自然保護の意識があったとは思えない。ただ残雪期の南アルプスを歩いた時に、スーパー林道が酷いことになっていて驚いたのは事実。そのことで、この運動の主旨に共鳴したのだと思う。

緑爽会のメンバーになりました

中原 三佐代

東京多摩支部登山教室で 2 年間お世話になり、2016 年ＪＡＣに入会しました。

以前はテニスに夢中で、ボールを追いかけていましたが、友人に誘われたのをきっかけに山の世界の扉を開きました。山登りには全く興味なかったのですが、あまりに熱心に誘ってくれるので、じゃあ 1 回だけと思って行ったのが高水三山でした。その時「この心地よさは何だろう。なんか魅かれる～」と感じ、その後友人の誘いを断る事なく歩いて 1 年した頃、きちんと山の事を知りたいと思い登山教室に入りました。山の仲間も増えて、行きたい山がどんどん増えていきました。あり得ないと思っていた山小屋泊も平気になり顔洗わないのも着替えないのも、何でも有りになりました。

台湾秀姑巒山にて

山を始めて 12 年目に入り、登りたい山がどんどん増えるのは変わらずですが、山のお陰と思える事がたくさんありました。その中の一つに人との出会いがあります。山の先輩がたくさんいらして、恵まれた環境だなと感じていましたが、時の流れと共に、

加えてコロナ禍で先輩方と会えなくなりました。

支部の低山を歩く会にはお目にかかりたい方が多く参加なさっていて私もメンバーに入れて頂きました。石塚さんには大変お世話になっております。参加できる時が少ないのですが、先輩方の顔ぶれが嬉しく、温かい雰囲気でとても楽しいです。先輩方のお話を伺える事が宝物だと感じています。先日、石塚さんから緑爽会入会のお誘いがありました。低山を楽しむ会の〈のらぼう菜山行〉でご一緒した方々に緑爽会の方が多く、この方々のお話をお聞きしたい、時間を共有したいという思いから入会を決断致しました。よろしくお願いいたします。

※同時入会の、岡義雄さん、岡田陽子さんには、次号に書いていただきます。

～～《予告など》～～～